特別
へ12
1077
34

早稲田大學圖書

利
1077
~~33~~ 34

藤裏葉

卅九歳　秋太上天皇尊号

夕霧宰相中将遂雲井雁婚事

三月廿日大宮御忌日内大臣殿参極楽寺夕霧同参事

内大臣殿ハ宰相中将被誘引給フ

四月一日比藤花盛内大臣ハ以中将為請使招宰相中将事

源氏君下賜御直衣於宰相中将事

へ12 1077 34

宰相中将向内大臣第事
内大臣内語事
以中将折藤花加客人盃事
弁少将歌葦垣事
以中将引導宰相中将令見雲
井雁事
宰相中将遣後朝文於女方事
源氏又教訓宰相中将給事
八日灌仏事

紫上詣賀茂御祓給事
同賀茂祭見物給事 語前御息所車争事
藤典侍祭出立之夕労宰相中将為見
訪給事 藤典侍 惟光女之
廿余日明石姫君入内事其親君同車
給事
三日過後紫上退出明石上参内事
明年源氏君可有四十御賀事
秋六条院准太上天皇事

内大臣任太政大臣事 夕霧任中納言事

夕霧中納言賜菊於大宮乳母事

雲井鴈ノ乳母六位宿世といひし人也

夕霧移住三条殿事 故大宮御所也

太政大臣渡三条殿事

十月廿日余六条院行幸事

朱雀院御幸事

於馬場殿有競馬事

奏池魚并雉等事

殿上童舞事

御遊召宇陀法師事

藤裏葉　花以詞為巻名　秘

河
詞云ゆとさよくゆりとなる藤のうら
葉のとうちすし給

花
源氏卅九歳の三月より十月まて也
みしかり梅の枝の同年也

秘
源氏卅九歳よりそのまゝ事

御いそきのほとにも宰相中将はなかめ
かちにて

御いそきとは明石姫君裳着之事
なりし宰相中将はなかめかちなるとは
雲井雁の事を思ひ給ふなりとみえり

秘

御いそきのほとには御裳着のこと明石
中宮参宰相中将はなかめかちなるとは
雲井の雁のことなり
別はあやしく

抄

夕霧の御事くるしうおもひよりするか
らに内大臣の退居ありてあなかちにや
さしのほしはりつきなく内大臣の
方よりゆるしやなかりけるとそ
きはめけるもなかめかちなるさまなり本

河

人しれぬわかかよひちの関守は
よひことにうちもねなゝん

私云此歌は内大臣の方よりゆるすまし
人をきぬわくしからやいとおもふなり

内大臣のくちよりかへしたまふ
一言申さしゆるされやへしされとも内
大臣よりあはれくハゆるされんとおもひ
て一言をいひ出されたるくきこえさ
せは秘事にして夕霧此志侍るとなる
志侍る

女君もいとゝ乃いとあはれ侍り
花衣之
また大臣中将ハその夕霧よりの作女
をとこもやんことのうへを侍る事

秘
梅かえの巻に内大臣の侍りし藤の花之
何此事かうへと
夕霧乃は侍らへしたるあはれかなる事を心
つくしのほいとそよらし侍るになる
よりて後ハあかりしある事しきと
なりもいひも称之
ともさきのあるに
夕きりハ一日の作ぬ此歌えこえいけよと
むくなきそなる給ふ雲井ハ中将宮

なき事と思ひよりてうらみあるの
まれ心そむきしもとゆへ
さすかの法はりかたひ
何ぞ右
ことわりの神しめさしさらぬ心地
なくしまとりつころひよるせとなん
按察音 乞ロエ 保按西信真名本
松なきたきくなるゆるし一本にかうき
何かはくりたしひとへり
おもと侍らせはより語りし

内大臣の心ときめき夕霧はいとかしうし
みけるぬ本
夕霧のかくり云ゆて心つれぬさ夜よ
むかひてとさまらの内大臣又中将ならし
事はそさこれは心とらかなもあけ
かくれ内大臣のそらよみかなし
かの家りし
花
中将定の御すいハ夕霧此方よりうけひ
こまかなるとおひもなりてうなにいもり

私云此義如何

（秘）（異）中将父君にもしきりて給はく

太后中将父君にもしきと

し事と云

私範為の義不審覚ハ中将父のまへ

父君乃ことの宮をかけいことしてさし

立（タツ）也といふ一断（メツ）しいのちにあり治

又かくあはしかは

雲井所に別人とはこえん事といふ也

人のためとくるしかり

又こしめて雲居所へやりけん人々父君

氣に対して志つくき事あるへし

まちかくき後みも人にまかれは

（秘）父君我門にうつて雲井所のあかめ

あしかる人しらと也

又内大臣と源父君を人へ対してあ

一切の人しれ也

志かやとされとちかくおやそやまり

字
うらくるまの句あやまりのことによそへて
抄云ことわやまりの作せてしもへる
まへは夕霧巻通のこと　并
秘
抄まけめへきなりとおもほしけるは
秘
内大臣の心
抄云兼案して後花宴巻さうと
く若三条の中にて源内大臣対面して大
うつくしきのおし時雲井鴈乃
事をやのおもんし兼思ひし此の心

と今此内大臣の心と事の行かたにつれ
て内大臣乃性としるへし
うへハつましくそうしみとけぬ御中
秘
内大臣との御中も疎遠なりけり
みともあるへく
抄云人ハ何となくてたゝはさみみ
とも思ふへし
ゆかりなく
不意におもひそめけるをかくすまいらんと

ことしくゆてゐきしを
つさし筆をとりてかくなる様
むすひあはせいつるを
なしひたり大夜乃大宗此法日あて　二十
ありく飛く寺ゐまりてなかり

河

極樂寺在深草　昭宣公建立

此塔いろとたるは
うくさあつ山草の
山あふりふるたれ
山あるをいらす
なそなり

深草天皇行幸行河之時昭宣爲殿上
童借奉天皇令好筆給有一筆彈之人其
搆入作帆仲帆非巧匠之所及自然之室
物也天皇常令随身給自行之還御之
間忽以紛失大驚給召昭宣公被仰下可
求進之由昭宣公奉勅命起立本立心中被
祈念云此帆不求獻者今生之遺恨也三宝可
加護念給求得之處此可建立伽藍祈力
不空求出獻之天皇殊以感歎群臣之中抽
被御被幼童之條定有被思食趣乎其後
昭宣公極昇進爲果他日願念立極樂寺
給云々

九條右丞相記云此度啓慶寺ゟ經取東
東西寺天台前唐院極樂寺法性寺興福寺
李部王記天慶二年三月廿七日皇太后（穏子）於極
樂寺為先考太政大臣（昭宣公）及先妣（人康親王女）王氏追福修
法會〻今案極樂寺昭宣公建立之在深
草

花　秘　弁

蘭奏に二条太政大臣忌月四月とも深
ちかうて見えたり
大臣の御忌月蘭奏四月とみえたりちかきあへ

三月とさだめ八月の除目は日ばかりにて所
しるしなどにてのほかなる事なり此目は七月まで
てまつらるる追考書云太政大臣忌日三月
也前まては卯月と定られ除目は延引
之亀今案極目は何ヶ月といふこともなく共に日数
をかぎらず然今三月をは忌日ゆゑに五ヶ月
とある目は百五十日ばかりなるは八月の中にて
百五十日にあまるべし当時は不用其説
是は其の日数以後は極目ありて空目は其の

忌月うちは忌日ならずとも行服中に用
ゐる令の文令明之今此十二月に蘭巻ハ八月除服前に日
のうちとすこしひきあげて除服せらるゝ
あしき文明などにつきて此後はまゐらさ
る事あり除服近づのほどあるべきなれ
遠くも四の陸し　假寧令服假条服年謂
以十二月為限不計閏月五月以下ハ並
皆計日ツ
秘
河海にみえたる後と摂家の墓所之古今の墓の山寺なる
ところにてとよみしは此事之古今内大臣此家へまゐる後之

春ならずしれひきつまいつきつまひきあ
まほしく
内大臣乃類ぞさ隆なるてはえ
宰相中将おなじく
宰相中将も夕霧之と申し行粧あ
まほしさへ
あのおとこをはつらしと
秘
雲井雁のゆくへも夕霧代々のら
つけさまさるべく

むかしひとつ続
夕霧乃むつかしくおもひ給ふ
おもしろくて御様よりハ
秘
うつまゆりくさみとて六条院ニすまれし
みなとやすきも六条院よりも
源氏も御前にしつかなるにや
宰相君ハ南にて五月ころまちて
秘
夕霧乃祖母よそよりも捨つ人
外祖母よそよりもましく

夕けてこれかくりかはし
雲井乃雁のさ夜中の声なるへし
おもしろしおもしろしいそく
時雨の夜よりまきれて内大臣より
吟しあそひし給ふ
いとあはれ志ありて
夕霧乃出家気よ物をおもはれつゝ
なみたへし
むかし見めくりし月人からしやあはれなるらん

秘
夕霧乃志ゆつれ給ふ事ハ二條院乃人こ
ゝろえ給ふ也
内府の夕霧姉の腹なる孫をもとめ
給のうへとおもふとも見えすしてうま
しくおもふなるへし
孫とおもふよし也
夕霧乃祖父内大臣乃いはれ給ふ
秘
事ならぬにはあらし志給へる
内大臣の詞也

河
孝事式勤事又孝辞 うつほの物語に のとくにまこみ
かうしとはかうのとき
身をゆるさぬなくく

弄
かうしし給ふなり

弄
帝の御ゆるしもなくしても
太宮乃御ゆるし乃給ふ事なれハ也
祖母のゆかりとおもひ給ひとは[illegible]
不よ給ふなる也

孟
雪舟[illegible]下にあり
みなり乃会なて

私言御法乃縁也

語りもく行くおもり来の世なり

内大臣のよくひ内来よ如らゆと

夕霧とうこ川之

うちしこもりて

秘 夕霧之

色かし汲とむしきとたのしきおしきすく

苑 三条の大臣の事也

秘 大宮明らかく何とやく内大臣と雅やかへ

きよしと妙いそうしとて

指しるしに浪しこに

花ハ雲居雁の事也疎遠ならる

うくませてよ夕霧の詞也

私何しても真南風に

秘 仙納しれあくとしく的なりなとよ

南氣なとも耳てあかまる花清之

尋 人くくりうに所りに南風よ埒うん

ともれなう詞也

春はいつもおりして
秘
内大臣のゐるまゝ難しく夕暮は難題
私夕暮乃名は内大臣乃あまりれすい
何事も年生名を浮かれる此題も
付難し御と雲居殿乃事なとゆう
きんと名難しやなと華や角やゐるあら
し難きも
しとせに
奥
世と存之

あらの也しこ名此名の春なし
夕暮乃年来の存念也浮かれとも
日暮れ難く
夕暮難きは御そしてせるへんと
四月（ウツキ）はつるあら
内大臣乃御難也
奥
七日之
苑
別は酒をよ事
上旬十日乃内と心得へし

私云七日よりはしまるへし
おまへの菊のむ
内大臣乃庭菊なるへし
頭中将して御せうそこ
柳本と使にて内大臣より父君消息ある之
一日(ヒトイ)の花のけしき
奥 深草柳本なるての事 秘
或 内親王宮より使して内大臣の綱

わかやとの菊の色にそめなれはよそにうつるやは
こぬ人のまつりと
秘 さそふとはましかは
奇 私云色ハ雲井とのすゑのめこと也
哥しハ大臣の御かへしハ大臣也
事たるへし 安同
またいとおもしろき枝よ
又 哥とおもしろき花よくさのみ
私云菊の綱よりのつゝ乃らよりまたるは合

とうけてきまいて面白とのまうり
まうつけ侍へるもんとしめ候

夕暮の秋

中々におりやまさる萩のむらそよくれ
とりのこともしらは

英山ノ太祇 中々トハ極メタメル詞ヲカリ寄セ中ハ言語ヲ以ノ気ニヤカサヌテイフハ保振セカ為也

河注撰
萩のうこにはされてふれは萩のむらそ
う進時も志らはそうけ哉

弄
雲居候又此方より夕暮成揺らるゝ哉
ありゆかされ侍るは萩のふまし候由く
ゆとさめ候はさにありや面白んとまうり
萩露ハ時なる萩ニ縁ありて又一軸ニ夕暮
乃也有ハいふそり思葉しかるあり
むかし情ありける之

或
此後ニ大事なり文字とそのハ面白し
と又申しゆかされて由そこしいる之

秘
文字ありし候しおれ乃は肉大臣主極
ゆうしうる之此上ニて八もし八と候し
き事なり候らく人様りくゆうし故人ハ

初音中将ハまさしくひめへきこえて
松は年来ゆかしき御返し紙よくあ
らさりしをみのなきまゝひろうせしお
の絹ハかくさめ候せられてしありみへ
次の詞ハくらおしくして朧しにうつり
とあり喜慶をしたり柄の心あり
くらおしうこそおくしはまれ

江　松

朧
夕霧此朧してはぢ事をはづかしく

中納言の御返しても中納言へまいらせて
御ともにこそと

頭中将の詞ハ　中納言へまいらせて
まつりしきすいさんハ此事まて

松　弁

夕霧大将の詞
弟ハ志ある人なりけるもあり
柏木の中納言をいふと夕霧を何とかされ
まさしく内に出らうしき随身ハ当用と
此様之中納言といふ事へまかせて

扨ゝ此御まへに
弄　秘
源氏の御まへ之
此音信と源氏へ見せまいらせ之　花
秘
おふ風ありて御ゆるし給へかしや
源の御雲井乃雁の事なるへしとぞ
さもすみ御ゆるし給ひてもそけなりし
うらみもとけ給ん
弄
孝なりし大宮
秘
大宮の教訓ありしかとも安給はて不孝に

ありし御今おもふ給ハ孝心乃い
うりくとなり
問
さもちうと御ゆるしらいおほさらうす
みゆゑおほしめすと
秘之此給秘乃義不審さもちうみ御ゆるし給
ふてそうあるさうりきもそてさやうに
すみ此給てとそてまへよ取りありし根
も無せめて源の御内之
御心あうりこまうり給ひけるなり

秘
はゆみハ内大臣まけ給ふ也
源の心へつ井におもふさまにまけ給ひてハ
むすめしと思ふ氏に心おだやかにとりう
はしもゆかしきハのまへ此花
花
是ハ夕霧の源氏よりの給詞也
秘
夕霧の御詞もやうあらそひとて人々
詞なりけり
私夕霧の心まて雲井此為のうらみ思
へしまさハ中かに給ふうらみ給也

わきとつひさ迄に含と
秘
源の詞
名やうけのはふへとゆかしと給
源の君と夫居乃事と志て日心
てくれ給也
秘
いづれか人と志てうけハ人法しく
夕霧此心也　少或按同之
秘
あやしうそもあまりにこく有
源の詞

非参議のことゝ何れも私まうす人にてもさある
はゞかりあれし

に　花

非参議　二藍

束帯の文なとはもう紀時二藍次よ三紀花田
次よあさ花田也非参議は二位三位乃中将
まふと又ちゞ青は時よ宰相中将非参議
よあしくてあるはあまりよろしく
まれは三紀花田よう人しとの御事也

秘

三位中将なとの様にしてあまとしとちさあ玉化

文三紀は似合さうな也

非

ひさんぎは二位三位などの中将よくにちも宰
なと二あめとゝきら松に非参議は殺に二位
三位あかくあつ物也二三位中将なとは紀
摸の事也

或

御流よりは時はあつ花は成なとして来
色が三紀也年乃より位外くかつよ猶て
あるを花と入つまようてあり色さ宿老
又位あり紀人はあると花くうしとありけてう

むかへ
私云夜の古衣乃文の中初年の時はあかむ
らうあてたまし二あゆくはあゝ花あくと花
あるうしうしまて浅云とい(ひ)て花田は
あくと花くとかんかりしてそあゆうへ二返花田と
はあくと花の名をとふくそあゆうへあさむ
田はあくと花乃うすき名をいへは花つゝれ
人峯相なりしまて二返花田此名浅黄と云
又云の人は此殺二位なりとまてはあすうし名家

遍し年とし官位とにつきて浅深の花別
あるへ年まうまれとも位あゆ紀は年比よりも
さうくこ乃名あ浅用汝年ゆきされとも官は
言えは心紀うゝの色を用ゆへ
まう浅まう
深の色うしよ用させうれなう古衣と名多
乃浅位の人をよもさせてなうまうへ
わう浅うさまて
夕暮乃ゆかりうらへ

多それは其妃
おほ萩の色に染そそれぞれにありさま
　迷てりふさ浪之
あまたの君たち中将とりそへて七八人
　頭中将之　内大臣乃子たち之
其代人によられて
秘
　夕霧之　安
松におもしひきはくろひ
　内大臣座席ふし出しに流くろひるせ

流ゆりあそし渡て
　内大臣乃装束して出るのく
少将まうし紀女房あそこにの志紀てこ出へ
　内大臣の少将あそこに夕霧伐かかて
　さらせるふ涧之
いとうざくは
楽
　かやらか涧
あやうにめあいて
　物としく志るれあらし涼やさやれ

万ハ留まりたるとぞ

かれしハさて 秘

涼乃事く 奥

涼ハきよく風流ニ縁よりてしさる

乃もくれなるあり〳〵しさて大厦け

さ留ハまう〳〵たくれて風流立たるぞ

こゝろまそうし

秘 たくれてこゝ毎をやさしるぞ

見ハ涼のさやう小隠しハ存理之宗半て

そろら殊し人ありしたしとぞ

奇 世の人皆源氏によるひきさめそあをしまうたりとぞ

只と内大臣夕霧とほめたらん世のまうひぞ

左遷ハ仕え乃こさるとまうさり

夕霧ハ儒門より立身乃人なまえぞ

んなりぬおしく

何 雄しとッしク

おもとめき物くしき万涼ニ境りたるぞ

ひきたくらひてそ

く夕霧とかめ殊出人ニ内大臣も詞く

ちふるまへし
物事やさしくしき
大方乃事儀さらに様ハなにしかて
若乃花代無しまして
春乃花のいろ迷と飛く
内大臣の詞
あらしに
色毎（コト）なく
ならしくらふをてちりかかり

桜ちりりは限色うをいつ迄花は春よ
またさればちりめるとありまより咲
ちりさる後おもてもえぞり
この花のびより
若を浮しさる面白し
夜ふさとの時
夏ふこそされかりまれ若乃をも松ふと
のよもとそひ年分の飛し
あやしう心まゝ

萩花のさかりをかゝりていふへき花の
奥より咲初るといふ心也
冬もいさゝか残りしゆかりよ（何）
紫のゆかりの名なり
（安）紫紙ハ女またとへいうの奥
うちほのめかし給へる
覚まて内大臣の歌也
月さしいでぬ也と（む）
四月一日に殿上よみて月さし出る

おほつかなし　殿下の初より七日に夕月夜と
ありけるをかりさむつきせや別り
これを考へし
（秘）前書ハ四月一日とあるを何の方様に於て
法あり是をも覚ハ七日に見てみゆる
一日（ツイタチ）あるといふ西日に
相そかくれくろし思ひをし給てあるハ
しく志め思へし給
内大臣その辞をして夕暮を志め辞

秘 しゆふと云
夕霧に志るなきて
さゆ仙して
秘 夕霧仙して耕砂あるへ
是ハ末の世にハあまりにてあめ此志さ茫ゆ
そくま物ゆし給めり成はこひありわら人もて
ひもそ給るんつうりきるか
夕霧をうしてかみて天下に有職なりう
内大臣と耽卸志るふハつねと根とう之

儒道より立身の人なれハ文才此なりれハ
源よりも法よくなりひ年と実取わ
用あるとみてうち成法へし
秘 内大臣の詞
河 天下有職（アメノシタノユウソク）
秘 よろひうりある人
我身をみんすててなすと云
文籍なと家礼とよひとあるへくと云
九禅抄 文籍 もんしやくとよむ籍ハ

昇

濁也〱

同えせんとよしもれいとよしもや

よしやう一皮せうるすし一勅答りん

きやくけらいとよむつまれ

河

史記曰高祖年〻父太公家礼敬之高祖雖子

君也太公雖父臣也又云 六年 漢書高帝紀 高祖五

日一朝太公〻〻家令説太公曰天亡二日土亡二

王皇帝雖子人主也太公雖父人臣也奈何令

人主拝人臣如此則威重不行後上朝太公

雖擁篲迎門却行上大驚下扶太公〻〻曰帝

人主也奈何以我乱天下法於是上心善家

令言賜黄金五百斤夏五月丙午上尊太公

曰太上皇私たふとしへしるよし 已上 河海

内大臣のまうしハなやうてあらくとゝ書此

花

家礼みよし見しほし侍さねまうしみ給詞

世俗礼といふハ子乃父をうやまふすへて他
人なれとも子に準して礼といふ事をなしと
乃世中も俗礼といひならはさてなれ
しのをしへといふハ古云の俗令の古云ニ
ところなりといふも古云読ありまされハあまり
あまへなふり乃をしへハ内大臣の秋と稀
まろ祝之多書のこるあかつ男なれハ教別
もあらへ貝なるへ俗礼の鑑鏡まハ史記とひ
くゑらへ俗令のをしへまて代なりハあまり

みえくしきなまうよ覚て給へりいふ
奥
内大臣をうやまふへきなり官位なり
よりて人つよよしすと也
秘
按ルニ見へてさう下給ハ父子の礼を他人ニ
も用ゆあれハ親身に男なれハ下とも
をうけつ乗事なるとも
口
義云史記高祖紀單父呂公善沛令避仇
従之客因家沛沛中豪桀吏聞令有
重客皆往賀蕭何為主吏主進令諸大夫

曰進不滿千錢坐之堂下高祖爲亭長素易
諸吏乃紿爲謁賀錢万實不持一錢謁入
呂公大驚起迎之門呂公者好相人見高
祖狀貌因重敬之引入坐 酒闌呂公因目
固留高祖々々竟酒後呂公曰臣少好相
人々々多矣無如季相願季自愛臣有息
女願爲季箕帚妾酒罷呂媼怒呂公
曰始常欲奇此女与貴人沛令善求之
不与自妄許与劉季呂公曰此非兒女子所

知也卒与劉季 呂公女乃呂后也生孝
惠魯元公主

文籍なと家礼といふと侍るへし
義曰此段諸抜の公不和付と内大臣ヽ舅
乃寛仁大度乃人ヽを称メ漢高祖ニ比ス此詞
アリ 内大臣ハ外舅叔父なれハ父の名ハかくへき
ミ身教ものおもねる禁令礼儀もしらぬ人のみなり
ヒ栽男とハ謙退メ多舅を苟重殺之安礼ノ
義ハナキシいかれハ此爲ハ此獣却なと西也ハ

述懐の詞之裏ハ雲居房を内大臣ハ許容を
ねかへ非スト家務の義ヲ陳し給詞之其后ハ
呂太后ヲ其父公ヲ高祖ニ与ヘタルヲ其母ハ
呂媼ヲ恍妻アハセタル此故事云ヘキ為詞之
雲井房は此内大臣許容あるさまてハ家道
と云つきあるを不経云此詞此脈よお意せス之此
巻ノ奥ニその秋太上天皇ある号此筆有く
人臣ノある号高祖盤觴之此首尾を取テ今
の詞アリ可味く

已上秘抄ノ内ヘ三光院自筆ニ而書入く
尋　あふりしのあしへもよくあかりしもあるかを
花　儒臣乃あしへと云
步　内大臣よりとしへ乃仙とく
儒臣乃夕あるの師道のるへされと之官位と
秘　いひ叔父あるれハこゝく此筆との経之
同　支按ノ義不経充色ハこ儒臣此まとかえ之
義高祖紀六年　高祖五日一朝太公如家人父
子礼太公家令説太公曰天無二日土無二王高祖

雖子人主也太公雖父人臣也奈何令人主拜
人臣如此則威重不行後高祖朝太公擁
篲迎門却行高祖大驚下扶太公々々曰帝
人主也奈何以我乱天下法於是高祖乃
尊太公為太上皇心善家令言賜金五百斤
注蔡邕曰不言帝非天子也索隠曰按本
紀秦始皇追尊荘襄王為太上皇已有
故事矣蓋太上者無上也皇者徳太於
帝故尊其父号太上皇也

已上秘抄ノ内三光院自筆ニ而加ニ此語
河海ニ云載之而三光被注加此段之間
重載之

いつしかなやまし

秘
内大臣のまう仙代太子やましろふ

あはれとうしみ給へ

思ひある給ふや

酒
内大臣の弁之

参りまゐて酒しらすまいは酒のこそ忠

しうしとものいまり ハイ

ひるみたうに給志千まあり けれ

私語抄不及引答

いつてう

秘
夕霧の詞也
秘 むかしをおもへはかゝるゆきとは
故致仕太政大臣葵上なとの御ゆかりと
おもへは為我もそむきつゝまへしと也
弄 夕霧詞也とまても致仕大臣よりは
おもへしとおもふ大臣のうちにも太政致仕
報致也
いつれにもおもしろきを
従者諸将をもとよもやしに御心をへきは
ましくりて夕霧此所のひとつなとゝる
できるへしと消しける詞也
はなとるくさましとおもて
河 御時よく 桐壺巻に詞也
花 御かたはらをうしろめたなくおもひて
ららもやしいとなし
秘 内大臣の時等の詞也 弄 御かはしきハ夕
霧を褒美しまて

萩のうら葉のこと

河 枝様

春日さす萩のうら葉のうらとくて君し
思はゝわれもたのまむ

松

内大臣詞へ并秘上ノ川分用之歌も同
松平よ此経まてハ合のてにそおつらし
中よおとしつまて君し思ハ我しるの
ましくいふ歌よ内大臣の補しらく此詞
則此巻の名也
みましき歌ありて此中将

内大臣の気色をうけて柳来此萩をと
りて夕霧此盃よそふるく雪井雁歌
指のらへ青ゐみそうり
ありたくやむしり
夕霧のいらへ志賀られて盃歌ありて分
やむうるへし
むつのはとにかゝれる萩の花よもつらう
もそうまうけれとも

并

松よりさたすはもてしと云得よよ在らう

松

かゝるハかこひ心得とは婚禮此松なり
ぬゆへまつといれし也
雲居御のうちとかのあすゝ世と思ふよた
とらん之松よりさにすと松よりるそよ
いふ松と侍よ世わり謎也とわ此松
あらぬよりてまう侍よ覆ふう也
かゝるは思ひしは雲井所よゆう乃也
松下句はそ形りとみの形んと侍る
まさとなりし其の然は心中にあるう

雲井居くとまけてむかうゝはそれは形の
つまそ根をも形さうしとも古よ浦と形う
あるとも春しはうて現も形んとゝふ心よの
形うり此歌うの心よけへうり又然は中より
の名く云界此人すゝは達る存なしとへ
也とも之れうふれぬ中寒う所よ遠根
もあれとみゆれれて没さし

宰相さうつきのかうありしさいつりには

河 御前勸盃ハ大臣の盃は納言以下獨りをもて

てなかにかへて盃をもちまいり指して

此も准擬也

花 天盃をたまはりては庭にをりて拝舞入也

是ハ氣色ありて拝するを罰此罰礼

をあらはせし

秘 礼をしまいらせし

松内府ハ罰とも又さして此氣色をしらせて

舎人しかるの氣みえし

夕霧 いくそたひ露けき春をすくしきて花のひも

とくおりにあふらん

河 續古今集として せうとこ流れの

山かつらかけねよ春のまつりかな

はかなきん

いくたひ咲ちる花をみしつゝあかなくて

ちる春にあふらん

秘 あまたの年をたてゝも花のひもとくは

ものゝへ能宣か哥にいくへかさねし
河にアリ此哥乃心
也ハ雲ゐの雁とゆうしかへるとよめり
羽中将ま(を)かへハ
雪と柳木によこしまて
たをやめは袖にほひてちるれむかしなる人ぞ
やまとも海きらん
河 たをやめ 婦人 日本紀第一 又手弱女人 多平夜来
幼婦 万葉

松 花も雲井の雁ホちかへていへり 葬同
岁 又書也へよ雲ゐの雁は威光もまさり
しきの花揆也
つぎくきんなる
花 逓流 字此義より
河 つくくしなる 循流 松不用之
松 さんしなる循し流るくと云義なりとも
ま縁し
あひのまくれは はかくしかりて あれなり海

さゝす

名碎中にてこれうかがに類しきな
もみしりかん山志しのすといふ
義なるへしやまの絹あまきさ下になり

七日の夕ぐれよりけふのかずに

河 月七日為魄 初学

抄 四月七日のよしなにて見ぐさう法は
さう法を上にいふかは上面法といふなるを

宮にまうでけふかける楕よもの

抄 萩草もかつかま翔まの之
私あれ絹よ月はさしおあれとむ[illegible]さ
さうせもみゆるかゝるおきといふなり
けてくいふなれ

萩のさ夜よのつゆをもれ
山路よいふれ皆萩のすゝ

年乃少将
柳木の身 和梅の大臣都よりきへ

ありさにいそしてうちまちふ

河

葦垣　催馬楽

あしかきまかきかきわけてふこすとおひこすと
たれ 一段 てふこすとたれかたれかこの
ことをおやにまうよこしまうし 二段 とゝろ
けるこのいへのこのいへのおとよめおやにまう
よこしけらしも 三段 あめつちの神も神も證
たまへわれはまうよこさす
四段 すかのねのすかのねのすかなきことを
われはきくわれはきくかな 五段

秘
河海に志ける今ふふ名ハ夕霧の方
より女乃事を親に申しゝやうによそふる
しそへうたふ也　異同　さてうたふと内
府乃ものやたりけし此歌之

花
あし垣乃哥ハ男のみそかに女をぬすみて
都のかくしをきていぬるを女の親に告
人乃ありけるをとかめそこにけつらんしとう
母乃なる之弁ふ将今はふれるるにあそて

うくへうとたらく此句ゐてもやあそうしつう
ましるる物そし此よへりけやききハむの
字と此句も此類ハ退く云てまハたるる亦
もたくらへうし□□よけやま代ハ以
をえれは年色よもる此気のとたらく此助
音しすへうとされハ草垣の言此詞よハ年
色よ為と云詞ハすしとうる此気とかく
つゝ代例の唇特してく猶よいうるまを
うと年へはけつとく紀まセろくしへよ年へ
よま為とあり米とゑるさへてとうまうとよ
むへうくいうおうまうとハ家のおらやふ
まゝうるとゆへ

以と字や寺うを

松 てき面（メン）ナルト 内太臣のみ形く

岁 よく気しとわ常しるる紅

洒 常む 文選 ろしうろき うをの仏へ

とし尾よまゝこの家法とし

河

あしろきの奇よ達人よありと病なきれ
役仕大臣年號むる謡曲と今感ゐあく
もとうられきす所よし記

舞

ひろむうくときおやまりると花鳥よあ
りし此物語古今とりえて時よ随てまる
事多之是ともりえてうるなしとそろ
きけい氣乃あまてうる也
ひろまるい家のおちやすれさる也回役云

歌

ありかくうるとひ所也
花鳥よひと紙むる紙年へよありと展觧
書写の謬とえ多ありてい其ちり所を開
入へてうるひ給ふる也今我云乃序
なる道いとうろまけとみ公作りひうなりて
なるくと弁ある物を用意多るをそ記ふ
うらふへきとあらして内大臣うに都
をかへてうひ入ふ給ふるなり此事も是に
うれし深常乃事とうてつましく漢家小

此例おほし又孟子などにも毛詩ノ詩尚書
の詞抔に随て用に随ひて文字ヨミシモ
かはりて海にも用ひたる事なかりし
侍るすへ皆く書写の誤とみえ侍れ
抱おもひはへりこそ
月は日の根ともなりて誠にかなへるも
いとくそうしきやうにて
秘
夕霧く
みちりつゝいとゞ人ゝくて

夕霧ノ詞
偏てむかしもほとくしう
河抄
あはけきる人つる山かけおもゐのかとく
しくともなりにけり
花
河海よのとゝる旅遠のおかしくしくて
かよ書りゝの子のほとくしきかうとくさ
ますふやうみちなくおもの詞のかとくし
うい旅遠の心ま一首の文に侍るひとよのた
くみのおもをとかとくしるめとをせ

乃郁と以名へされハおもしろくしきと云也
さや秋も付らかくに右の名しおそ
ろしろへきんよ宰相中将の以てへ
き朝ハ一定たらるりてし事かりりて
聞の由へ有ろ事く
安
かとくしハおもしろくしき也
とのゐ申つり
夕暮乃祝中将の寝所と今私し給へ
宿宿とへきとの間へ

あさんや
河
朝臣
舩
おもく祝中将とさしてのすへり
伊やもみ所
夕暮乃体よと聞させ給へ
おもきいろう
大臣のつしし秋とさしての所朝へ
むしわすまし
安礼十七八へ

中将花のけしき自ら様よ

秘 此中将乃夕霧よいふ詞也
あるべしといふ也内大臣の御事也
つる説いへり
私大臣の御事也此下よ花と見えの様躰
をとはうそあるまじ女の内にある中
将の御事にいふべし是又
松よちらされたるハあとにしらず花の比
夕霧の詞

河 古抄 花にちるを松よちらされたる花かとおもふ
此ふりて花とはされける
秘 おもしろきも菩之内府河よ同し
岷 あるまじきことし御事歟之
拾しやさ
花のけ乃様躰をあらはしたるにいふ
あらぬと拾しやといふことさせめまよ
とハ志るべといふべく
中将ハ御のうちに

弁
扨中将と夕霧此方よりこそはさはし
事とや
経りのあさやうと
松
扨中将は我方のまけさらしと嫉く
心ひのみて
人さ海のちから海あり
柳木の名は夕霧の行事もとをられ
月る人しらずたになりゆきしてやうて
及続くれさらしとも

うし経やもくみちなき川
夕霧の寒しき人今はつらぬ思此
月あまる人ま月なしりやもくれ
中将のなさけも
おもこ来いまりし
松
夕霧
わが身ひとつは津うしてそ
よく堪忍しらぬとも云さへ　美同い
うしくいとわさらし法く此方まで参りえ

のちの代自称するにも作のまゝ内大臣のま
けにはへる也　私云此義尤よし秘抄ノ下
へ三光自筆よりさしかへられたり
又或書云内大臣の方より斎宮にゆるし
まつらくと久寄の面目らしくゆゑて仙お
うけそしまゐらんとしトアリ此義尤て用
ゐ又此詞筆者乃私云てまゐらしこゝ西

女ハいとをかし也
雲井存の心

あらぬ不拘くやまし
雲井居のさ夜と久寄比の心にたち
ひまいそけまそ見えしよりもいひくと
猶ひそのかつて不足するにたへ侍るも

世のためしかな
秘　同
久寄の詞
並ちらにまかる物しいたさぬとも世の
ためしかと思ふ人こそあれ
私云或書に大代出記川秘ニハのちに作此川

右西園寺するに志めうたいしとは
きこゆるまれハ東にも志すむしとそいへり
おしにはまた世すまぬ人安めしよすむとし
候りと云ふのやうき事とぞいふ
むかしてこそうりまそとも
是ハ夕霧の別なりく雲井居よりおよま
そうとも夏ひこしこそううあつそ
内大臣も中かしまへし寝しかさむ
とうけりし好也

あかれとちう縁かなと
雲井雁縁にしみける詞也
かおるのちとみかうけるあしかしれ
弁少将の何りさうくかう内大臣さく
むやまうりしと好みへいさしのうす夕霧
の雲井雁よ加うり縁也
いそれめしける
少 うちつけならむ乳
苑 まうかりい此人々とい者也申しハ弁おね

とりて
秘
いさくしとひさ人ありとも
いつきいいつくしきてねりねといふみやの
事此方にありやまとより河あきは南花
内より合に夕暮の役仕大臣木戸給し
事此やうにひさうそれと夕暮此心
にいりそへやさそていふにねしりあと
此歌なり
くちのところさしいて人まわしつゝま

河六拍
河くちの関のあらかきやまもれともいてゝ
我ねぬや忍ひくよ
六
河口　呂催馬楽　河口乃せきのあらかきや関
此河のあらかきやまもれともはれ　二段　あらかきまもれとも
いてゝまれわれねやいてゝまれ我ねやや関のあ
らかき　今の玉あらかきのあらかきひて　維
もし此に代おやよましとありと夕暮
関のあらかきまもれともいてゝまれ我ねや
さしていへまわりつまとむりしと云

ませうとそれと女こそつかはしけれ
なりけり

範

弁少将のおもひけるをしらで時夕霧
のまれハ河口のせきと云名ありけるに
ありしかば女よろこびてつかへしまま
さりし関のありけんハこそ守り志て居る
くまなしとおもひしとおやくぢう
さも志りなりて今はあはれなりにける
つらしとぞおもへば女く心もとなしとなりし

奥

夕霧の秋さやけきは行くれ雲井有のこ
ととひおもやのおもにハやさしう思ひしを
も雲井まで有やのこゝちまちてあはせ
らまほしといひて得かりけりとて

秘

河口 催馬楽之河海花鳥等ノ說
とかくいふ迄もなしとやかくに定りたるも
流のまきにまけて歌かしこきのやうに
当代の御おもひなさき 三光院御說 義勤 河口関ハ
伊勢ノ六帖ニ 河口ノ関ノしるし有り

私云弄秘とハ河花の流と不用事書
又同し九禅林又同案にいて我袖なや
思ひしまうとなりてハ河花の流なりし
ろし雲井雁のあさき名とひ侍ハ名
あさとよみあさましとの給ふ也ハ所
のさ夜も思家まハ河花の流付へ身元
存を俗楽秘ホノ義也て用之候也

女いとこそくるしや

雲井雁の心

雲井雁

あさ緑名ハ浅ひなりけり川口へいつくかはし

しらぬのあさ緑

女乃本言我あさき名浅きハ川口は堂

乃ねしくさいつ辛きかふらし事そと

異

わかゆくへく

雲井雁の方あさ緑名ハ雲井此所の

ほやの方成夕霧のあさくいひ侍りて

いつもしいふハ夕暮のゝ乗よいかう
しはすへき用ハ守ル物之ユれりうるう
事とよみ人てよめり
イカハモテラレトハおニノ我子ストク夕暮ノ旨ヲコトア

秘

レハ守ル人モイカニノモテラレケントオホメクセ
雲井の雁此奇おもくと今俊ナトの歌ハ
いつき侍よもしは歌ニカトヽ　实清
或校宗長説トニノ武人ノ云蓋抵乃うき
ひよおやまもわしゆてとふらひ哉

弁少将ころハしれ還ハ夕暮ハ我ハおやニハ
中きぬ物とまけ給へ還りしてまゐへそ
まひ此おやのあさ此君とかの道しもかハ
いつきやしたもしし主命と女此かの
哉え

あさ浦しとの歌
雲井雁の羽うらうき海へ
此め哉まもきもと

秋

大風のふきくるかたやまく

もこしからまして

夕暮のさ海て

右夕暮

ちるにけりくきたの関と河口のあさきり

のこれおほせたゝかむ

河

菊多剗（剗 花鳥）関在陸奥國磐同分抱八雲抄

河内ニハ備ニハキクタノ関ト云

弘仁式云

太政官府

應給考ッ陸奥國外散位三十三人事

擬郡司廿八人　白河菊多剗守六十人旧条

略之

右直國府外散位如件者宜兼知依件

給考

延暦十八年十二月十日（亦花鳥）　花鳥曰載

乞

今案関の名あハことく守ゆるよ奥列

れくさきの世にしとのつるし人まうかあら

なれハ川口のえ縁はあさ縁とゝ名

秘

とはおわせさらん給といつまて
くゝさの関　義　奥列ノ菊多剌関之俗ニ
クキタノ関トテ云ニ付て守ル関之それも
何事ハあるぬ也されはあまねはなきまて
あてハ来し給也

弁

くゝさの関　ごくた同し　くゝさ此関ハ
奥列くゝさの関ハくくちの下之その関も
より出るもしもあるまじき也そのとひかされ
一てる名とあさくいふ事し名ハかゝるハ有けと

答さるかく又花鳥よありけしこ紀乃か
此心紙本として又しぬへき屋をくとし
て面白き義之説共二かねかひし仏は
夕霧乃女のおやよらひやしよしととき
あらせそうひしと夕霧此関のあ
給との給しと女君乃あさ給ひ紙かう
しなかしうみてみよあるへ夕霧人
くらくりの家ハ如ふ理ありけさ給たり
みえり給し給るしおら人まて

あひにかゝりて
莪茶泥酔乃余気にかゝりつけて夕霧
乃給いし書給へ

あくるも志らぬかゝり
（何）
劉とされ（し）ある御と志らしと称しめをし給
拏関書ナトニ本門より
入てこもえ乃身を
さか女人乃何としるとあやうさ
たらさ志うりわれ（し）はあさいのあれし
あさいハナトとあまうて
内大臣乃詞　あさいハ　鶴寝（アサヲ）へ
されしと讃ふしくさうて

花 かりしもそれ退出る乃名のおはしまそく
うつ花ノ義ト同し
秋されの御あさか
弁 夕霧の姿
花 大将有花ありと人の朝比ゆかりけれ
ありけるく
或抄 川右 河海
秋されの朝けの霧の秋霧におほつく
しほみぬる君かれ

御みみハ桜志めひさか
秘 桜のこく桜思ひのみちも
中ノ君ハ見ゑこまて候花成
花 此間ハ思ひつよ仏みつしいほしとなん
中つちかうゆゑてもあらしと見ゑ侍こて
桜そいまたのとそうほしさやかいひよう
身後逢みと入清さしろいてよう
ひさうく
哀 雲井店とも綱ハそのりしく志るすかたと嘆之

秘
思ひあひし時よりさはりせすとかり
給はくてやみぬ
はてせさりける時常しなり
花
花は夕暮の又此中の秋くつきせさりけれは
今もかく女乃心をとどまりてなかむれは
人くさきは又さりて心つきて今なせしぬ
弄
つきせさりつるに女乃心にあけぬる
秘
夕暮の秋ノ初にてつき秋くはしませまし
又こそぬへきこと

柔
此花乃心津くしはみえける　少
ともかくもしのはふしおもとにもまさる
あらはす袖のしけく成
む
この年月は思ひわひ袖くしわりしつとも
あまりにおもはすそらをとけは猶も
志けくともよのつらしおもかけ人々や
かあるとよと給はれは今よりは人目とる
かくましく見よりしさて給ひ
秘
今よりは志ある夜ましく哉そこと文

いとあはれなり
夕霧の文はさるべくといふべし
うちゑみて
秘 内大臣の手紙を褒美し給ふ
是はおとゞの詞又文の中は此詞あれてと
はけ給ふそ手紙とかゝれたるはおかしき也
むかしの名残なし
花 是はこの男のうらみは露し給ふを也
松 此詞草子の地なるへし

はくりいてさうしまれはみなくしやうそておかし
ちらりあひつる事なれはまうり給ふ
雲井雁の姫君を思ふ人と朝は志ふかく
おほしたる大臣へおもひあまりはいつまて
そこあるのおもしろきもしらるゝあさ
事と雲井雁の人事と察してまう
方へかへり給へ
御侍ひのちへ
後朝の文此使に縁といふべし

中将なりしむかし後に
柏木乃侍従とおいしらて
侍従よひきこえし
年月出ひく文乃かゝりしけむ
右近のそうたりし人此
太夫将監　思ゝ叙爵せられしかハせ
うたよみて
夕霧右中将之左大将兼のへられ
左中弁てし息今案太子て然れ

六条のおとゝも
源氏太政大臣ゝ
宰相つかさのも
夕霧ゝ
宮さいつにみそと
源の朝ゝ
ゆりしき人も女乃もちハみそて世遊あなし
寛平遺誡　左大将藤原朝臣（時平）若功
臣之後其年雖廿之之熟政理先年於

女事有所失　先勘し

人まかせにはかりひとつ心にまかせてあされさる
事むすほし人はめけさうすなる所々を
おほえまさる

夕霧の心を源氏も猶々内大臣はその
御事にて侍りしを志めて志もひとつ
さ侍りともかくされさ侍りしまくる心うそく
色しかくれん心を絶てとかめ給へ侍也
おとる内侍をきての御まつりまくして給
おくるけをれやう成世の人もひいつるす
あらんや

内大臣の宮初よあまりこゝろしく厭却
内さるりし世人は源も勝立る心あり
てこと気もせ侍りし又夕霧とかへりさ
あつまりてつけくされをあまくよしもやう
みえ志侍へさ道も世人よ結句内大臣ともよ

さきまけてゆかしきを人は後世の人しれ
ぬといへるよし
さりとてもまつ方さけりなるかなよ心かはり
してすみかし身仏くえ給はゞ何しぬ
是より夕霧よ仏とけて後の何大臣
まてハ皆夕霧の子の理運よなりたる
人それは志侍らんと仏なりましてぬ
こゝろとあれつゝしくなりまてある
めきこそれとき仏りし給ふよし

侍るそれをいつにかなるきみの仏とさうてとみ
ゆるしとまゝの仏人おしつらくせおき
て人々しめくさ下つき給へる人なり
内大臣の子を源氏はよし給しかられ
はゆるしきや
私内大臣の子孫源氏の給ひてそれよつきて
夕霧柏木なるへきさまとなしくへきらく
事うちあひ
内大臣と夕霧の御中まは後絶へしと

源の花ちる

御子とみし源

私
御子(シコ)とも見しらるゝ文　源のよろしきお

ほうがうあて

わらく

或抄此説にしたかひてとくこひとつね

のやうに見て猶かうおもふへきてはいかゞ

しら絹つゝき人二人ありしまきやうなき

打かへす此説に事なし志あるさ仍て

花
うすゝき表はうすき花田色　白き仍てハ

みそのさるぬゑ

栞
源氏抄九巻うすはなだ

抄
名の藤なる白き仍てハ表はよかる

なりうつるさぬゑ

宰相殿はもとしてあふうき此事あらゆる

しそあめあひてまて

河
両文在房六月のけ丁子染乃帷子

花

絡けうより四花よりも
すうし又みつきハ二段花田へこてあやハ
うつかさ為るまてハちうをいなく
丁子ともはつきねく

松

夕丹十九丈をうし又赤し丁子ともめ

染

花為よ志ろきり麹子源緒掛ニ丁子染ノ
浪こうう内くろき又ハ丁子をこきうをい
為うも同し又為うくさうやとくハ又丁子
染ハ西宮たん右為明云絡て染出をく
絡梅うとハ宮うよく丁子として染るへ
松云花為すハ出てあやとあり師説のな
まはしろきあやとありてうてあやハ
なトアリさ丁子染として又白きあやと
以為不審

染

志ろきあや

花

志ろあや

くうんおいりのてさてまうりて

秘
花
くわん仏抄ニ見ヘタリ
國史云仁明承和七年四月八日請律
傳灯大法師位静安於清涼殿始行
灌佛事
私勘 公事根源曰 △灌佛 四月八日
釈迦のうまれ給ひし日ハおほやけにも灌仏の
當時ハ九日より神事にかゝれハ御
殿の母屋に御座をうつされて昼の御座に
てけしきのあを山のかたちつくりて御仏をすゑ奉れ
導師まいりて香水をそゝきて灌仏をおこなふ
まくのかけりかけて小方に札をとりて
杓をもつて五色の水をくみて仏にそゝき奉る
つゝきて殿上人さゝけもの布施をも
色々に出しいたす紙に付て風流をも
そゑ殿第の局にて臺盤所より出
されハ蔵人とりて殿上の臺盤の上に
をく上達部も布施のものつゝみとりて
て殿上のみすによりて白木の札に書て次

事は座に清く御新の御布施ハ紙とか
尚不案の人ハ此布施施人とく御導師の僧
まゐりて仏前の作法をとりてから
の水と一よくみ合せて先御導師くらん
仏を洗浄ますゝみて笏とさし膝
りましてひさこくとおて水を汲て灌仏し
て後礼仏まて導師布施給てまうらく式
仏生會ハ推古天皇より始まり釋迦如来
乃偶毘藍城にて生れ給ひし時天龍下て
香湯をそゝきて浴し奉るにあやかりてまつり
甘露の事縁由也
御公卿ハ内裏にての灌仏儀之親王大臣
の家にてハ作法おのつからなし給大将
と見せしめん為めに須し加除之
御くらくよりまうのへし
親王大臣以下布施之内裏にかゝりますゝ之
布施すなと出させられ女房乃布施
しをかへし

そせおしおほ庭けさ海よりくん
例
灌仏 四月八日 布施寛平八年四月八日定法文
親王銭五百文（大臣為字也） 大納言四百文 中納言三百文
参議二百文 四位百文五指文 五位百文
六位并童五指文
親王大臣紙五帖 大中納言四帖 四位五位二帖
六位并童一帖とし
推古天皇十四年是年初毎寺四月八日設
斎會 日本紀

私云 昔より諸寺ニ行フ佛生會ハ推古天皇ヨ
りはじまれり 灌佛とて 内裏并親王大
臣家にておこなはるゝハ 承和七年より
はじまりて 仏に水かけ奉る事ハ同書に見えたり
花
灌佛とて 内裏并親王大臣家にておこなふ
ことハ 承和七年にはじまりしこと右の書に見えたり
おほよその行われしとも見えて
内裏にておこなはるゝ法会の作法之
ならびに法おこなはれしも

色も同しく内裏乃事と云
宰相ハ志け位なくいふへきなりし
色ハ夕霧の雲井殿へ御かよひのさ故之
まさしくねとみかけさらるなる人ハ
花 夕霧のあひけるを雲居のうへ
弄 夕霧まんとかけし人之
夕霧の一方まさることわりあるとゆめと
あふまし人にあらへしとも
私云 つきしとすうしねかくハさりして心よわせてハ

の給ふなる人とちりて情ありけるを源氏
とて色ハ夕霧の官女乃事と云
色も縁乃侍りとうたへて
私 一方にハ夕霧我身つ源ハさ源氏ハ
あふ扇まいる待るらし
又源氏内大臣ともあられハ当時あつかふ
人まへしのきまたはくくてり
何 あともありぬんやハ
いさそらくあふやことるみよ如ねかんん水かう

花
さしとひとりしてめの浅
まかりねと思ふ黒圓なる葉ともゝて浅
歩
不通といふ詞なるべし
川なる此ふたつ侍りて以下なり
あるしのおとゝもいとしるく内なるを
内大臣乃御夕霧と贄(にへ)なりてとふ所に
思ふよりもて離人ありしと云ひなりて
かし浅きのみて
まけゐうそれくれおほしさん程あはせとつまと

此二條ありしうけ捻
ちまた又内大臣乃性成以下り
内なやうなる浅なる浅
夕霧乃尚ふ方よ思ふつりさはしるを
あはるくくはそてはしらうみを務あて
女御の浅ありしるなるゆりも
松 松
女御ハ浅さハ丹ゐよりけるかな之 奥
女御ハ今上 冷泉院の女御 弘徽殿 二条ね
國乃四君服之

小のきみかゝみ人〻
秘　雲居乃雁の継母也
花　二条北のかたの旧君雲井雁のまゝ母也
奥　女御の母内大臣の北方
何乃くるしき事かはあらん
夕霧のおほいとのはくるしかるへき
あせちの北方なとも
む　雲井雁の実母也
秘　雲居の雁の実母は今は按察の北方也
秘并同
かゝるくゝみてうまつりしにこそおはすれ
按察乃北方は内大臣の中らくかへて
くはしくはよすれは内大臣をせちにくたし
此雲井雁北のかたにて内大臣北方
うれしくおもへ也
かくて六条院の御いそき
花　明石の姫君のまゐり（まかりのすし）　秘同
たいのうへこれは渡りて給ひて
河　賀茂祭前日於斎院右近有神事云々

歌御阿礼御生也 見古語拾遺日本紀云
神聖生其中者 或御禊ミアレ祭の名
一日と御禊といひて御生木ハ榊鉾アリ
よろし祭時乃旅所へ

花
あれは玉依姫の御留神とふみ給
あといふもやさてはまさしく外からし
とあらしはへるよ御形もあら神
鉾いつすとみあやとのあはさあはら
とらふあよあしとふり

秘
昔より此時の祭上の葉花のはらうく
若葉なりいふもの此あるへ
世俗御禊と云是ハみあれのミツキツ
云故ニ名ヨミミへ

弄
御生御形むかしアリ別雷社御本をあれの
神館へ其上あり御くみ初より見へてまう
まいのはるく
非くなときさらひて非とまかひ御あせ
つまるやおもひて非とよりおもひ給ふあせ

御車よりおりして
堂上の女房のかゝへ
くらしまゐらす
さてもみな人〳〵数かすくにあまりて〳〵と
えらひ以川ゆくらう也
まつりの日よりあつきに
堂上両の日の暁よりまゐりて参く
人さまは初はらえまへさ
みあれのくさに堂上加茂菜の人まいる也

御さしこさ
御裁縫　物見務ある也
ほうこくの女房
あの初よりふれしくし友るもひ持上あ
是は此ほうくしあるは堂上し明かの
雅素とひつれ
なまく而しめるかと
此は裁縫のあるよ車をさて而えて行也
加持にえれしゝ代発り

余所より見ても此源氏葵上は御懐妊
しとしこし御なやましく
おもく中宮の御ゆかしさやまさね
秘
六条氏御息所の車とあひての御つき
車なし内あらそひ之
とし避てまく車あらそひの時なりく
時よりうらみおもひをりして
源氏の大臣人々に驕ならしき心をとて
と各はいましめ給ひ御く

あまりくるまうらさかしく人と大いなれ
おもひ給ひて
秘
葵上の御くちをもの給ひいつまて
神なかれいひさしまて
大くなりわさしそのかとはの御ひきちて
文
地の事ありとおもひわ給ひまりき
のあれいひさし給ふ　秘ノ義ト申上られ
但或抄云不吉なれはなれ
のかきさとく
或抄ニ葬ニ相あつかれしやまく山の花

みやこにはすみてなしけり　但舞ノ本也
此事なし
猶つまさまわか人こと
六条御息所と葵上との車の争を
なかりて
中将云く
（松）身人まておもひ出給ふよしにて
定人まていかさま千ゝまて
（松）枯野え中なる立寄てあひしれ人もし
そのむかしあかれしや
もえていとはつかしさ世をかれしは行末を
およそにていかゝなりの世をとをくさ
まれ申されしおもりおほえたる心の世なりし人
たえおもへきとそ申すはかなき御れいと
うらかなしいて
此段の詞いさゝか化れる松の詞を
此段の如くおもふ御息所葵上なりしの所
て世間に定る物ならぬ也　但舞源氏の

山のまへに草花なとも植しさくらんなと
とり来よ語りつたへん子孫の事外にあこ
らぬ事して子孫よ語りしらく家のならの
まへに栄耀をは深くきたえしと紫上へ
かたり語詞と見ゆ

上達部みこたちは集りて神楽の遊ひハ

又へうた出来候
紫上此様成は座ありさまさへ源乃（秘）
まつ御様なるへし
紫上のさしきより源氏のさしきへ（異）
いてまいる
御清行のきさき乃　使ハ林中なるなり
（行）賀茂祭　欽明天皇御世天下挙風吹
雨零今時勅卜部伊吉君日子令卜乃
賀茂神崇也撰四月吉日馬繋鈴人

蒙猶歟而駈以為祭礼
以中将近衛使例并近衛始可勘
賀茂祭春日祭の使を清司と用ゐて
ハ東坂となりて舎人陪従ハ近衛
司乃被官なりけるよしにて使のいそ立又還
立の事なとの儀式ありけり
同賀茂祭乃使のやうなり一勅らぬ
またも仰々子息中将為代なりて車をと
にのりて東坂と異なりけり

かの大殿まゐりてゐ川
柳本以中将まて祭乃使なりける内大臣の
亭より出立られけるに上達部なとも
見ものしてなくまし源の忠様なる
采つかはしける
藤内侍のもとにけるも
惟光宰相女之
惟光の女典侍なりける人々
おほえことにて

惟光と源氏乃夫よくと紀のまうけ
給世られいくもへし
宰相中将いてあら乃本まさへ
夕霧藤内侍のまけ出さくとや
ひさまゝて
うちとけすあくれとくし
夕霧藤内侍思ひける中の使く
かく風んしれさうにさまき給あるく
たまゝす

秘
藤内侍の使く夕霧宰相升房よき海
まろ年く

夕霧
何とかや今日のかさしよかつみつゝおほめく
まてになりにけるかな

秘
とくとてよろしくいひつゝけふたいしのなりへう

花
久しくあらね使く

夕
まみのうきしハあひとよせうり

私夕霧の宰相中将藤内侍とハ文
あてとうしひまへりとみゆ

おりゐしはなをかつらといふへし

秋

わかせし四はなりをもへて
松たらくはいつかしおもひとおもう次
とひはうちくもくさしうて

七夜内侍

かたはらに月させし草はなはうら行
しくや志ほらん

花

折桂ハ及第乃事にて文章生なとをいふ
事といふて
松葉をはつらにかくるゆへいふ　定家

御乃ゆり

新勅

久かたの桂にかくる葵草そらの光に
いくよなるらん

河

晋書曰郄詵字廣基擧賢良對策為
天下第一為雍州刺史武帝於東堂會
送問詵曰卿自如何詵對曰臣對策為
天下第一猶桂林一枝崑山片玉今以之
課試及第之事作来也

於雜上

菅原大臣かくふらし給ふる秋ちのよ

み侍家へ

久かたの月のかつらもおほつかな夜風

あともふりせそしられ

よりせられてはしと青やかしらり

松 桂の葉風の博士のゆとありし夕ま月

汀 葉風 桂の葉風の 博士にこそへ雨たれ

松 そふかきにこそよく志つ紙へこかれし夕

雲は及第の人こそなれ

これはけまと称られへとおもへは

夕霧の紛にて称られ夜よりて

出るはかなき

桜この花しいふ

岁 此頃業平の跡

松 夕霧の紛とかく深く

私して後に此晩に家らあまくあま

かくて頃まつりは小芳とひかりて

花 志上のすて

岁 明石姫君の内の事

秘

紫上のさいはひならんと

律るりあらしかりけれは

源の公紫上久しく内よりさひしかりつ

ひまなかりつるいつもと

かゝり　む　清少かしけんとや

明石の上之　秘日　源の君よりかくならんと

さへも浅井よあつまりなり

紫上此公清からは実母なれ姫君の

石上も人毎つまく清浄しさまと

かの人も物しゝ

秘　明石上之

これ清きつ御かも

花　秘　御そしの姫君の御生ゐにて

姫君之紫上しさやうよなきまへつ者う

すへ給ふしてとも実の母とゐしくなる

給そうしみ[illegible]まへくさまと

これありにてへさそまつり給へ

紫上の方より源氏又明石上姫君なりの

仏中と宗して かくの如くなり
まさいとあえらなしるか
姫君乃あさ程く於乎なるえ
御めのとあらはるとも見えさせふしの
見及ふすりくとて仏如うる如此
文法人より傳ら給へ月ネ見へてあり
事ままもとさひやりてせんすいはるま
しさしいつ不足なりしも
程ほ如如しらするん上さ後如りいえ

見るふ御しぶよしの仏ともあるかれ
こゝろい
筆上此秘との如何之
以ひとよりあらしよるか
筆上のよく此如本て深乃さる如之
あ如きりしも
明石上之深乃如かて
いもうとまれしく
明石上の仏

座んむしろ敷へ渡ありさ後より
明石上乃用意志ふかき女性也よおと
らぬさま也
移り来るん行ミの任あひさん
明石上の母此居之実母明石上ハ此物
うつ姫君を見へてさうつるへきと母此居
君ハさ御祝儀すゑの時ハ見え奉らぬさ
なましさ後いかしてさとさむさ
その程ハ人へさひてまゐりまよ

秘
紫上をひて参りまゐて
れてくる後あるもそちらくさう
河
花
輦車之
紫上ハ姫君をひ給て輦車ニ乗て
参り給ふ居君のちくさうのあゆさま
しておいつれ見まいせてさひかさる
奥
見くるしうへきよし之
輦ハ姫君の車北のかたへし紫上ハ
同車して参内あるへき車乃行ニ紫上乃

華ゆゑ仁をつゝむをいのちといふなりけるかと
は明石上のすゑはしも也　藤花也
事としつるは不可説也
明石上は先と乗は斜めなく
秘説は紫上は姫君と葉と同じくして
末のつまは明石上はちらちらからかみを
奉りて其の人は姫君の此君ニ今
秘は明石上は末摘花也　異義也
河上
古は女房にて夜ゆきくれぬるは門
よりおりて夜の程を机丁とさせて
またうち向く
まかくるまうち隣を
明石上乃歌
人のおもひわくところかれ
秘
事を化をえて
源の草花のさるかれもしくせよと
思ひてさへいとしき儀式なりとて
うちもみくりし州さ

明石姫君のさゆへ

うへを渡しにおくれしは

紫上乃御養子のやうに寵愛乃御事

人は於けりまいらせ渡しにける御事には

らまうしけれと

花　秘

紫上の御子ならぬ事にて

紫上乃御服なし渡しけると

於紫上の御服なしは実母の御父姫

君の御事を推察して思とりなく

せうとれさへつくしくおもはるれは見て

くせつへうぬ紫乃御子なるへしとけうと

りおもんみの御事

於とし宰相乃君も

源氏の御目も見とけ紫の御子なれは

母うき此不足なるやもあるまじきと

三日過してそうへ渡してまゐら

荻

明石上乃立切りまいり給をその御ね

ては紫との御たいめんありて

多ちへり

秘 紫上ハ退出ありて明石のうへまいり給ふ

此君ハ給ん

秘 紫上明石上と御対面ありし

私云此対面禁中明石姫君の御方にて也

かくおもふ事もなふ

秘 紫上の詞也

少 姫君の御こしの給まて年月のたまハ

みゆるかたハ隔心ハありなし紫上の詞也

私云姫君のおかしく成長ありまて紫ハや

しなひそ給明石ハ年月をへてき

ことも実母なれハいつまても隔心なき

さあひのうへと此給ふ也

物ろうみなし給ふこれにうちとけあひりしあ

秘 此ものゝ字ハ姫君をさす人ありてハ

たし給人あるといふ也

奥
紫と明石上とのあはひこれは姫君
母の君達ゆかりにあはせてこれもこ
ゝろことなる人也
河
明石上しるしろし絶しく物深きとあるとぞ云也

猶すくれたるゆへなり
秘
明石上を紫上人と紫上よりも思給也
むかへて後源氏君ともに給ふよしとぞ云也

又いとまをかり
秘
明石上の心紫上に似かり
そこの御中をも
源氏のよしくの御中には紫上を
よろこひ扱ひ給ひよしとかや
かり給てものゆかしひ
抄
明石上の心
思ひたる事は紫に物を我身を卑下していひ
あはれなく

いて給ひしきはよそほしく
紫上ノ退出ヲ見レハ及ヒナキ事也
紫の退出し給儀式よりもかくは行
粧ひ給へきと云
扨て車よせゆるされ給て
秘 紫上の事也 花鳥 姫君の御事と
ありいふ
女御の御ありき後よりこそ形めてたく
弁 紫上なり女御よりは大臣の事成ると也

花 是ハ明石の姫君の母也女御よりは給
ふ事と車よせゆるされけるとかくある
中ハ只明石上の子なとにもあらぬ也
私云此説花鳥の義あやまれり紫上は
て車ゆるされて退出し給儀式なりぬへし
女御なとのなくしと也
給ふ形に御身はかくしと也
あまた給ひしもたまはりし後ハ御身にかかり
元来ありしよりかつまつはしと又紫ありし後

とされハむかしかちひらけてしく又所とも
ひおとしある明石上乃父
（秘）いまつりきまひいるのやうみ
姫君の御すく明石上乃父
源のこらてましねハひとつ物とそ見へてきりまする
（河）すましこともうちも八日とかれもされ
ぬりのへあしみてこそありける
（秘）同書出奔をいまり
少なき海くまむ門乃海ふかく一つ物とハ

みなみ海也と門乃浅川へくるえ松
うましこれにしら紀伊と海の落乃首ハ
あおまりもそされたるにそうかなる紀伊の心
八日とり物あハ何をみとり乃へくるる
むしさろよ紀川よおきけるし津み
明石上の仏明石浦より源氏帰京
時物成る又物ありても大井乃里に移
盈ろそ経移へり又此姫君の三歳の時

忠上乃ころもへたち給ふ事なとあるも
されくしけは
姫君まいりへまいり給ひてのさ夜之
住よしの神も
若ニアリ又若菜巻ニアリ
秘
おりゐさ夜よりつ事
姫君の給ふありさ夜之
御さまるゐぬことうさおさきくすれ
明石上乃よろけうひらうくと云

大うされよせおりかえ
源氏姫君あつに給ふも不足あるこ之
あへて事ぬ給さ夜うら
明石姫君乃事
又ましき氏給ふうり
秘
ましうおく
ゆとこゐへゐ給うて
明石姫君よあつそふへ又
こ乃母君の

明石の上はそひさふらふ段
きさまへ
以上見分して
行 桃所
まれしくしあつそひあるやうの気
松 うへしさうへ事
紫上とも
竹 何ろしひあつまりしくうらとけゆく
紫上と明石上とはすへ

さりとて何しろ色ゆかりれをと
松 紫へさんと明石成こまへり
武明石上乃紫へきさ候と紫はよ
かめ石まするとき
おもしろしのとおかさつて四世はつた
松 源の氏命乃内ゆきて
御ましりひあなさ候よ見へ所して
姫君女御まいり乃事へ
松 是し源乃ましくさひすへ

なしくまれと世にうけるか

なくまれしゝふかり夕霧とやの外
その中乃色てうすてうける

志河もり法めれハ

（秋）夕霧ハ雲井雁と於るしおつす
とハかいしらけ於んと

源氏太政官ノ体て隠居をもせんの
御心中ハ功（コウ）成（ナリ）名（ナ）遂（トゲシ）身退クなと
色いのう人此ほあるへし

源氏隠居し出家あるへき志あらんは出上
御子あるしかれハ心のとゝまれし秋好
中宮ハとゝめかきね給ひよせ給ふさと
ハ明石の姫君も六条ハ紫の御女の
名残ハさりともなりまかりしやと
源の名ひまて

夜乃御こと此

これハ秋源氏より物にふかくしきた
よりる人くされと夕霧と御子乃か

みてうしろとゝきさせ給つまいにれ又
夕暮の躰略ありしと見えく
あまんとしまうに
源氏のおほき明年四十歳なれハ内裏冷泉
より御賀のおこなはんとおもえおか
なけれともしもとあれハつまきその
御心にたかひぬへし
河
執政人四十賀例　昭宣公　貞観七年
四十歳

古今ほりかはのおほいまうちきみの四十
賀九条の家にてしける時によめる
さくら花ちりかひくもれおいらくの
こむといふなる道まかふかに　業平
その秋太上天皇よりる年す御流くるえ
秘
給てこふくらゐ
花鳥ノ義可然　つかさかうふり　年官
年爵也
寿
花鳥とアリ　関出同

文籍しも
家礼トイフ
事乃処

義

あの漢高祖の故事をひきて尓云その外
太上天皇乃尊号をえ給ふ人臣にも尊号
高祖盤觴之時前尾ヲ以テ此事をのせ
よし須せり納略して私にも其趣へし

範

長畏天皇以下ハ皆謚号也位よりさりまへ
る帝の位をさりてえ給へる今ハ尚さし
ならす太上天皇此尊號也位につき給ハ
さる人の院号ありしハ敦明親王を小一
条院と号せし外ハ其例なきにや但

太上天皇と号せられしかりて院司并
爵封など有しハ太上天皇よ一事かハらず
示されしなり又此物語にも藤壺女
院なりしにハ六条院乃御事のハ太上天皇
にもなずらへられしと云羽ともそへられしハ
源氏の院殿乃陽門の尊号にあらず
又之御封乃おりハ小一条院此院号の時ハ
御封以下如元と宣下ありて太上天皇の
御封ハ法令にいまだ定りなかりし

東宮の食封は二千戸なりし延喜式に
のせられしは小一条院は東宮此時の
御封をそのまゝなされたるよしにて源氏
君は太政大臣より院号をうけ給ひ給
へり太政大臣の食封は職分にて三千戸此
よしみえたり小一条院の例とおなし二千戸
なるのよしにや見えたるよし記されたれは
源氏と以前は三千戸なるへきにかく定めて
にもかく法成寺関白は家を及て食封を

くはへられしかはされは別に
殊恩なりし也六条院の御封は是よりも
なれてたみえたるを河海に太上天皇
封戸二千二百八十戸とかかれたるは如何
書り法令には三千戸と明也

江

三正十九院号例　上東門院　万寿三年正
秋院号事　東三条院　正暦二年九月一日院号
漢代譜曰北齊　武成皇帝　河清四年四月
帝禅太子位自号太上皇後為天統元年

不践祚太上皇例

漢朝例

史記曰於是高祖乃尊太公為太上皇 蔡雍曰不言帝

漢書曰諸侯將軍群卿大夫已尊朕為皇帝

而太公未有號今上尊太公曰太上皇 師古曰太上極

尊之親也皇君也季之父故号曰

皇不預治國不言帝也

本朝例

草壁皇子 天武第二子 文武父 追号 長岡天皇

日並知皇子 天武子 文武父 宝字三年有勅追

崇尊号偁岡本天皇 見續日本紀

舍人親王 天武第八子 淡路廢帝 追号盡敬天皇 イ崇道

盡敬天皇

施基皇子 天智第三子 光仁父 追号田原天皇

小一条院 敦明 三条院御子 寛仁元年八月廿五日院号

本春宮坊

太上天皇封戸 二千戸 勅旨田千町

院司 別當 公卿 四位或五位判官代 五位或四位 殿上人六位

蔵人四人 非蔵人なし 主典代(シユテンダイ) 廳官(チヤウクワン) 召次所(メシツギトコロ)
仕所 別納所 御厩所 進物所(シンモツトコロ) 所衆(トコロシユ)
武者所 御随身所
太政大臣乃封戸ハ二千二百八十戸也太上天
皇二十戸也 而院号とよりて御封給ふと
いふ事あり
私云此封戸乃事範為よし 河海
おやまちを
かゝれてと世乃伝ふり

源氏此ほまても執政の人多かれと
むかしのきいとおもくあてかんしも多かり
範 ありたかての詞ハ政所の二代ぬあり
源氏ハ此間太政大臣なれハそれより政て院
司事を補せら統ハゝ也又御の太上天
皇乃昔の例とありしかすし事
院司なとさりあり統ハゝ也とある成て
私 ての字清濁有義て濁りは太政大臣の
御封ほかわりすると

さ侍るハいはれしさきを申給へて
いはてしさせ給ふ院中乃作法乃こ
とくと一きハ御中比儀式とも厳密
なる事なりとそ

しら小家乃手へきさるかくさへ青

秘 かはゆくしかるへしとそ
御幸の儀式ニ准とられしとそ
かくても猶ある事見ゆるとハ給ひて

みるに 冷泉 乃御心ニ御不足ニ思しめ
すとて源乃御子と志るし給つへき世を
さかりて位をいふえ給つる給ひしとそ

内大臣ありけれて

秘 内大臣より太政大臣ニあかりまして
弄 同し致仕のおとゝれ多まの御時ニ太政
大臣としも内府より直ニ任とし給事
白河乃一初平清盛公し内府より任相国なるへ

宰相中将　中納言ニ

夕霧中納言にかゝる也
はよろこひは
任中納言参賀之内裏へのよろ参慶
拝賀ともいふ
あるしのおとゝ
内大臣也
夕霧ハ致仕の里亭にあつまりけれはある
しのおとゝといへり
人にあなつられそさむしく文法なり人

致仕大臣の女弘徽殿女御ハ秋好中宮に
をされ給ひつゝ今ハ又雲井の雁をとし女御
まゐらせんとおほしけるを夕霧に
なされ給ひかはりてひ給へハかはりぬるに
心ひとつ一腹立ありしよりしも女にみて
より今ハそれもとくとくとあるをまくすへし
抄
雲井の雁の為ハ大かたくの文法ハ夕
霧に定りつゝ後へしし給ふまて
女君の母いふのゝきたと

松
雲井雁のめのとか
六位すくせとつぶやきし
乙女ノ巻ニありし事く

夕霧
あさみとりわか葉乃菊を露にてもこき
むらさきのいろとかけきや

秘
浅緑ハ六位と云へこき紫ハ三位之袍
義可秘

菊
菊も
わか葉の菊ハ浅みとりなるへし附て露

花
こき紫とかきていとしらまし也
袍色ハ衣服令一位深紫二三位浅紫四位
深緋五位浅緋六位深緑八位深縹初位浅
縹(ハナス)也深紫ハ紫卅斤にて染也浅紫ハ紫五斤にて
染之深緋ハ茜ニ加紫浅緋ハ茜ハかり也深
緑ハ藍と苅安にて染也浅緑ハ藍と黄(キ)
蘗(ワタ)とにて染之緑ハ藍ハかりにて染之今世
四位乃袍三位已上と差異なきは一条院
正暦の比よりかく成ニけり小野宮

右大臣の記にみえたり又紫縁成して今まで
せられハ女工所のやう紀定にきこえたりおこ
なりし古は浅みとりなりとあれハ七位衣色
也六位ハふかみとりなるへし又二位三位
ハ浅紫なりしに元紫とよめれハ一位の
袍乃色とかハりのなきとしも大概を
もていふ常紫なるへきものへ房明条殿の
中納言なりける時九条太政大臣袍をつかはして
元紫とよめり京極中納言し条殿

浅二位の時紫乃色二元まてハ志りさりき
此代乃もの元の天此羽衣とよめり後撰
此袍よりもつさ高かるへし
浅縁ハ六位乃袍又紫ハ四位以上乃袍二元
紫ハ三位此袍也古ハ四位叙二位と後紫
没袍とも四紀にみえたり三位より一位
まてハ同色なりと今の世ハ四位の袍も
ゐらし差別なし　後撰に房明四条殿よ
て中納言に任られける時九条太政大臣袍を託

かくし題の句に
おりひさや是ゝ成ぬるへて三ころ
此ゑくとさんとは
とあるは此の成之それをも中納言乃
事とも紫としいふ記
かくらちしおりの一これは
夕霧の詞六位すくせといひしより
秘
さいりしにておしまへ
大輔のめのとの詞也

也大輔のめのと
ふた葉より名たゝる園の菊なれはあさき
色わく露もなかりけり
同
粉志られ君かよはひをはしへつるまて
まつやこの露しるらめん
浅き色は浅黄六位袍よりいへる也
後撰七
露たにも名たゝる宿乃菊なれは花の
あるしやいくよなるらむ
と云名たゝるは名高しといへる也浅き色は

あさ縁の事
名にハ名もちいたる人もやりまこ
たまかしゆゑと侍しるへ
いつにてもせ給へるなし
大輔乃めのとに此事を
語りたまひまゐりて
夕霧中納言よりめし給へハいたまひまゐる
とりすへりはかしの御かたに太政大臣よ
あつまり給へハこそてあひ給ふにもたせらるる

衣せ申されハ
衣挟之
三条殿より
秘
大夫乃給ひける様之
衣大夫此事を二条乃事のかよ大夫
の御衣をたけるなるへし
夫此おもし御しく
太夫乃給ひしまうこ
むかしおもしろて

大空乃かきくもりし時の文夕暮雲井居
ともにさめてそえて時しけるのさまを
ふりへし

せんさいともなし
秘 樂天か白よ童稚盡成人園林番喬木
トいふうかもとし　見
髪絲千万白地草八九緑童しわ白也
白氏文集

一むし落しも
河 君かへし一村落去の森れ志きそれ
色ともめりとられ
雲乃出此門なり

ふるさくすられ
秘 雲井居夕暮之
あさましかりしよれ
雲井居夕暮れあひその雲え
ふる人さもの
大空乃此のふくさ

夕顔

なき迹こそは思ひ出あらしみし人なりけれは

ちりやなきのましみ水

河

志清水　勝因寺抱云ましみ水とは出る志水

をいふとそいふ清水といふの也

秘

水くしてあるしる迄とそ　河川也

我宿のいさゝ小川の水なかれして

そこにすむひとりしれ

あはれかくすみしてあれは思ひ出ある

しよかとも

也雲井寺

なき人のかけたにみえぬつれなさに心

まついさゝ井のみ

秘

大かたの心なき事なき事を

古書なき人のかけはみえぬよ心となる

とは其夕顔とおほゆるをいふとも

わかる山といさゝ井はちいさき井也

河

八雲抄云出るとみへ小井といさゝ

小川といふも遠き水のあさくてある

海をさへいつまてもそこに似し

るす人のけふしもおもふ氷みつこ
と頼成りしてそみるか
おもふうちよりも
太政大臣内裏より退出のついてに
立よりたまひて
むかしおもひ出し
大宮の御方事なとし
松
中納言とよはれしに
夕霧也

かほすしあらみ
花
うちのあやしきかたさらんとて内外おもく
かしこき雲井といひしかれはいく
ちかひつる也
女ハ文の名
雲井雁のかりうちとられて又都と
あるし夕霧ハあまた女人もおくみあるも也
かみさひさうらふ
ふるくさ此事也

ありけるは清くなまし
松 おの座りは此方さまへ
うち志をされ
お園のさ波
この水の白さへうつりしそれとおもへは
おとひとして
花 あさき夫は夕暮の月様の祠へ
松 松緑は太鼓太良兵衛夕暮さまへ
奥 身聟さまとなりて其の白さとさね

夜をれしと寂まれは夕暮と雲の祈の
中まで 耕形みなして
松まの白さ見ての麹向さまへされとも
太夫の御さまを此方さまれは相園の
二人と流して ひめ結之
お園 その文は麹本は此へと心ねかんさへ
小松も若おもひまつり
向 恵こすれかみまさとゆまさかまもと
松の木君代まちかねん

咲きし庭のみどり葉のいついつまでも

奥 小松をさがしに参りまし

あの羽に葉ハちとしてとあけ給ふ

太宰事雲井居のおまへさ人に如何なり

秘 秘以下は見えざりし

事いみしてハ此所のまとよく分りみ

おつれまさ此人とくらぶるに人として様子ハ

若木とちよ栄へ給へと

松 松ら秘は栄子の若木とちよ栄へといいく

関東は大宰の御身は此頃程なる御しいとも

くらのりん夕霧雲井居にやすくよるまり給

居りはとの御年みつへしし只今を積

てへとこ結つきれ

おもく素ハ宰相の御のと

夕霧は乳母なり

松 待ちかねし此仙と

たとへとうかしとさひし事

宰相乳母 いつまでもまろげて毎此二葉より移さしかハ

せ松のとふく
うらゝへ年かあとしゝのとこねの松を
とる秋の風にまとしつか
秋
夕暮ハ句編雲井居をもとの山もと
あさおくよりたひにみちあ旅る紙云
女车ハあのるくおりてありみて
二条より根さしゆせるといふハ雲井
居のさゆよとつらしくあらわたへし
行幸陣此日あまりのかとに朱雀院にゆり幸

あつま
花
康保二年十月廿三日村上天皇の朱雀院
に行幸ありし例をとりてかきあらた
河海にみえたりかのそ書にはとは
にし侍　其同
以下例とも古抄にみえたり
康保二年十月廿三日御記曰此日行幸
朱雀院辰四剋出紫宸殿自朱雀路
至朱雀院入自永寧坊就馬場殿右イ大

将源朝臣可令召御馬之状源朝臣下殿御
手更参上召左近少将為光々々進立東
階北邊源朝臣仰御馬令馳為光稱唯退
還本陣暫左右近将監以下近衛以上各
六人起陣趣(移イ)向御厩久馳御馬向馬駐
左右大将下殿執御馬奏参上奏之御
馬北上 先十列 次當年駒名十疋 随次馳畢
或抄云此事若葉上よ枝のり華此後
いとあるへしそれハ此り華はな之文ハ

甚よろしかハ秋によるりおもはまさ
例ハ常なともあらま
少〃書云此事とハよろ川源氏の業花に
はしらすにのみもう
朱雀院なと
源乃源氏乃院も御華之
あるしの院
六条院源氏之
三乃时より華あるて

康保の御記に辰の四刻に紫宸殿より
出御ありしみちより月花門の時より幸
とみえはへりけり
また南殿のよ
御簾のうちに　此等六条院用意也
さ月のせちにあやめもれを
五月五日菖蒲の後騎射ありけれは
やめられたるを詞のうちにあはせて
うたよませらる

まいりてのほとに南の殿よりあり
御花宴乗輿移御殿自坤東透行列時
未一刻下輿入内
或抄に見えしてうちとい未時はかりにとゝ
見ゆ此花のさかりしまうて夜に入移と記
莚名の上の布単に錦をしきまゐらす
とりて
せじやうとひき
軟障に絵をかきたる幕なとの屏

よりうたへ

みつかれうかひのあさ

(秘) こつかはまとの御膳とつきなくそ

まよはせられうちの鵜かひなりけり

(同) 御厨子所　別当一人　預膳部　瀧口六人

鵜飼四人　網代也　類　職負令之　雜役

戸頭等クサリノニヘアリト見えたり

鵜事

先代旧事本紀曰献御饗之時祷白而

(奥) 櫛八玉神化鵜入河底咋出底埴

同六条流にてのうたに御厨子所の鵜かひ

のあさとは内裏へあかるやくは御厨子

所より北御膳とはりさたまれるにそ

まかなはせられうちの鵜かひなりけり

(同) ちいさきふなもくらひ来と

天徳四年五月十三日申剋鉤殿召漢

着冊波春助下納捕奥瀉一二唯鯉鮒

即放入之夜還御

應和元年三月廿日之鈎殿覧戯納又
令漁舟
御記延喜八年五月廿八日従神泉苑
西掖門入御埒殿左大臣御令捕漁
右衛門督清経朝臣棒取捕得魚奉
覧則御前料理供膳餘給侍臣 右衛門佐菅茂調
御膳此厨子所一
盛人階下調給下 此時騎射小々度之
同十八年二月廿日入神泉苑東門至馬埒
下輿此間左衛門以網捕池魚付此厨

子所調供又南廂幔下調給侍臣亦乃
両一対競馬
同年十月八日幸朱雀院為院遊作贄
御馬也左衛門督藤原朝臣請捕魚依
請左衛門官人率門了令昇細釜入施細
前池得鯉鮒十餘唯於此前調供又給
砌下調給侍臣
まうしたてはあらんとはあるれと
馬場殿よりもとへ人あまうつりおはしまし

花乃雲にまかふかひみてめさせ給ひ
とあり弟子乃説也

山乃みかとハ津ゝておほろねとわしおはしまへハ
秘 行しの御まへハ秋好中宮の御かた
秘川向の御かた枝ともにて未紫のう
はるかにハ西にして秋のいかゝなるまゐれ也
東北川にて乾の秋好中宮のかたへよ
住よしゝ西の町と志めらるゝ
中乃ちらうれのべ

秋好乃御かたの色にみえて此礎なりと
御ざかへりいとひて　御座二之
秘 朱雀院也と六条院と也
岁 主上 冷泉 院 朱雀 との御座ひとつにて源氏
の御座をはなさけて御うつされたる也
松に此義可也　秘ノ義也
せんしありてあるにさせのおほと
みこと 冷泉 宣旨ありて源氏の御座を
朱雀乃次へなしとされたる也

秘

アルヒノ作庭ヲ川ナケヌルノ同座ニシキ
ナシナセ給ヘ

見しいにしへかゝやくしき代
朝覲の行幸すれ鳥袍をあて上皇を
拝しまゐらする事

秘

朝覲行幸乃儀清もあるまじき歩
私やくしきは茶ノ字乃仙礼

池乃いさゝた(こたり)のかねより
池のいさゝそゝみする例 範鳥ともあまのた

鳥のつらにも衣かけさつけて

奚

同此紀清さゝまれる儀礼又将はなとあ
ま鷹よりあふくさまや定はけし
養老ハ元年としてもあるまた将鳥乃
御労しけまにて奚ハ御前の池にて
ふたにふりて此時ハ将を貴きもとるや

河

又ある後延速かもとよらへさまりく
捕鳥奏階下事
延喜六年十月十八日権中納言藤原朝臣

着小鳥於菊枝立階前奏之　舩木氏
有進御贄
鷹飼事
康保六年七月廿一日藏人所延光朝臣
以左馬助滿仲右近府生多公高右近番
長播磨貞任等為御鷹飼
職員令云主鷹司正一人掌調習鷹犬
事
御鷹飼乾人所被宣也　納乾人右佐

奏之歌
依御贄之時一座人可賜膳之由御之
松ゝ右のたけとつては則右近の少将乳
おほさかとおほせゆきむひてをらして
なりのまつる
後仕お國御とうけて御膳よ頒とる
ろせ例あゝアリ
秘
おとのは御膳よまつる
以口女魚不進御　日本紀

みさらんきちかれはゆきとかとし

青き海り
王卿取献物事といへりや折櫃物　花ノ黄ミ・花ノ字　件廿三九二十不入

ゆゑしかつくしきさまにはいてたまふさま

くその人めす
樂所人之地下の伶人也

わたの大樂(ツホ)まいりて
こと〳〵しき舞楽ともはおほしけるへし

朱雀院のよそちの賀

源氏と彼仕おほしあはす給し
時のま

賀王恩といふ物
賀王恩　或抄説は王の恩を報し
よろこふ義也

内(ウチ)のみかと御ぞめきて
見えて　冷泉之　桐壺の息舞つの勅縁也

御衣をたまふ

おりてあふきしたまふ

沿

子息頼勅勘し時ハ父卒踏定候へ
あらしの流さく紙にしせ候て青海波もん
おりむらし於
あらしの流ハ源氏へさく八葉權流の紅
菊
蒙船の時もかさし紙折ありし於ひ
より於つゝく

添
文海さ治まり流の葉しおりつくよ 袖うらの
まし秋流こみかん
紐
立すらひし事よ也

亀まられハ太上天皇 太政大臣よりよ
なりまへの年流そそてく御國へよらし
うけ治なすなへし
おくさの前りハ
おむの?のありまて御紫衣の時のうや
まれも人入りれ
御國ハ人臣の極官うれハつくみつり
紐
おくのこさつ
高当まとおてハ念しいおわりし也

時雨おりしきりなり
おの気色かし此句ふりしころ文様
情よりまり
せおせ
せりくの雲にまかへ隙葉此花をちりみれ
世乃星もしそそみれ
名ろそのやうのとまてみゆ葛ハあまり河見
ともそあやまれし宜付
河
慶雲景星の如く
契
同じ年乃仙境河海に慶雲景星の如

続く仙境乃事
一勘慶雲ハ河海にうかく尭の時
乃祥瑞也仙境の事なれあられ慶雲も
葛の志もよせあり又葉ハ星に似る
也しそこふ星とよあり又慶の雲禁
中乃事にある事もあり
河
南仲記曰應胥慶雲之瑞生尭也雲向於
北斗余南雲龍灌之上臻尭母感氣
枝岫雲發之下入尭母之懷妊也

帝王世記曰堯帝生時紫雲霞於殿上
此帝時雖遭九年之洪水民謗不菜食
時らそあり出しとさなし給

桐姻の如く

河 秋くさて時しくあつまられ菊のくされ
うつろふうしにまのまさんれハ

船 河乃月みと周 月みよく けてりとかり
源の太上天皇よりつりまふまいそう
あさき河の紀志つ清つたとと

奥 花

白橡（ヒラツルバミ）
むるよあり　奥同
白橡ト二文あり あをきハ青色（アヲイロ）あり此ハ
赤色（アカイロ）ともに清うをハてうつらにけれや
えらいとかれ文章くさてにハ年童此裳
米とそりたハあり文よとうりの下かさ
孫なんあと文まえびをあれ下りされく
野行幸やもたの鷹飼ハあうえまいあさ尾
よきらみゆき此巻よ志つしとりいる河海けつくと

乃函服なと内宴等の例にのこされるもあるか
またハ書しるす事也浣や水原抄ホ乃
浣ハ洗ふあやまりと
橡 頓 和名 綴 トクルリト号 私云世俗のドン
クリト云木之百葉はつるのきぬとし人ハ
ことにしつしたりもゆしくおもおも
橡衣四位以上の衣之事也なんハ上﨟乃着
すつゆすれハ此衣着かるの人に料する事も
ありぬハあらくあたゆかうしよれるかな之

にうるみれひし衣のことりすくもかんと
みえしこひきもさうとも
はつりきのとれあらひ衣あやしくてよに
ことわりもしなこの乃夕る等
水原抄云秘説云わろくのすしの染さ
物云河海に此弁 衣服令 儒に尼令
天長格 正政官府 新儀式にあかの
紀丸かさのせられさせたれ花為ようるさ
然つとくさ要を約ようして略し写

或抄弄花云 橡乃事 延喜式第十四雑染
色部 赤白橡ハ櫨と茜として染ておく
とさすとぞ 青白橡ハ苅安紫として
染てあくとさすとぞ 唯白橡と云事
ハ別ニ不見 赤色青色と云も同事也 天子
内宴の時も令着赤色給ふ 雲客も
もとも依時着用 紋文等ハ只と云所見門
高ニ見 御乃赤色の御袍ハ唐生綾（カラノスヽシノアヤ）ニ
花鳥行幸并蔡乃うし 葉ニ云浮紋とぞ

以上一条禅閤白昼抄 永正元探三廿七 白橡と
名様尚識不審事以着赤色青色ト
青色と云事乃あやまりか 白藍なとも
云儀は欽何篇ニ白浮ことあるハ云れ
青色赤色通用乃様とみえたり 別不見染
色は凡名様不及子細 大略上下官一条
殿雲白向題子也

是は此ころよりはじめなり

冯 舞童の装束

同舞童のすがたはいつも赤しきを

一勤ひとへは天冠をしてあてうら紅糸文く

総角(ソウカク / アケマキ)乃額とみえ

見しりきかたも成

花 小楽となく 秘

日のもとをいとおしきも也

冯 惜く

ぐあるをたるらくしくハせん

花 示所の用意よ及びまへそれハ大鼓鉦

鼓をならし乱声をしおきハおもろく

しまとみり

らんのはあそびらしまりてらんのはりさ
のはおとらじとめす

秘 注

樂器ともあつる女房之女司の御書し
御書案のまへ同託よ以書司女官ヵ白
禾惹ら要見ちり累代の禾惹と納ら
内ゝ示く

花

御記延喜八年節會雅樂寮立樂後
召和琴 宇多法師 書司 唱舞於庭奏く

注

もれはけりきらまおもかと

注

奥切

はぎんよ見れはなくしまひれるを
管絃の奥を大やうよ以てく
うぶのほうしれらるぬゝ忠

秘 注

和琴也
宇陀法師 和琴名物之以椅作し先
一条院御時内裏焼亡之時焼失く
新儀式 四月旬儀
若有奏絃歌者近衆府音楽託内侍奉

御出御屏風南邊右大臣々々起座跪候
御屏風南頭即勅可右堪管絃親王公卿
等大臣奉御退帰召出居合置草墪於
御帳東西一許丈大臣先進著草墪次
依召移著大臣召書司々々一人執和琴出
東障子戸ノ献之 謂宇陀法師 若参絲竹式召殿
上侍臣能歌者預之王御遊勧盃数曲之
後参見条

小野宮右大臣記長保二年十二月十五日新
宮之後出御南殿同右大臣以下管絃人
著御前草墪次召書司々々女嬬取宇
陀法師出自御障子戸ノ置草墪前又絲竹
次々取出皆書司女宮（官丸）役二人見前例或
書司女官取出和琴已後次々絲竹近
衛次将等執之賜

或記曰延久四年宇治殿命之於南殿御
遊之時召宇陀法師和琴其詞曰御夕十
ラミ此詞有故々々師説云宇陀の法師也

しくへし

朱雀院
秋をへて時雨ふりぬる里人もかゝるもみぢの
をりをこそみね
抄
こゝろは朱雀院の御在位の中よりかくろへ給ふ
まで又卿は述懐の心なり
秋をへて時雨ふりぬるとは朱雀院
御下の翁ゝ時雨ふりぬる里人か
御紅葉のちりゆくをもみて
かくもをりしそ

は
檜垣　遊仙屋　朱雀院の秋は代々かはらぬ
もみぢ葉の色は昔にかはらねど
門冷泉
よの中はあきのかりねのやとりゆゑ
をりしも御法の庭のかぜそよぐ
むかし昔の紅葉葉のかげとうつしかたき
心ありしこそ
秋よりの御のもみぢ葉あはれ昔の心あ
しにしまれならぬ御錦ぬしらぬ
ときこえし心をしりぬる御心なれ

松
常志きの紅葉ハあはれにも

行
冷泉院法皇敷乃御兄
御かくれいまして
冷泉みし比法ありさ後へ
たゞ目に付物と

松
源と申上とて見とつめしみえずとも

中納言のさふらひ給ふ

松
夕暮く見も又源よく似よせともめさ
ましまれ見よ深あ幸遣

私ニ見ハ夕暮のみよく似よると
兄但いつもせても同し
あるにめてたる比寄くひやおひあす

冷
みもと夕暮と又似よひ形し比みと
はにられ候へ
あさやくにまれつしき兵ハ
又何さや見物しきあれ夕暮ハ
ましさうし

奚
冷と源との似給ふま又夕暮も同しやう

これハいかなる人にてましましといへり
作り乃友上人
河
唱阿殿上人
新儀式にみえたり
弁少将の説
弘梅大臣之
さる人まへにこそ
出世の宿執ある人にこそあれならん人なり
ありといふ之作者ハひとへに源氏物語なと

の事伝へり
一
凡此巻ハ源氏乃栄花の作り伝へられて
ありし上東門院賀茂まうでに入内乃時
輦にのりてまかりいりけるをうつくしうみたり若
菜上にて女房乃ありし物語せつさ
そめそれよりおもしろうありて作りまゐら
うせ給ひ源と源氏をは作給ひてあまた
しく凡乃やうなる世間乃蔵裏とあり

ありとかきこゆせりぬ給ふへし